

2月定例校園長会にて

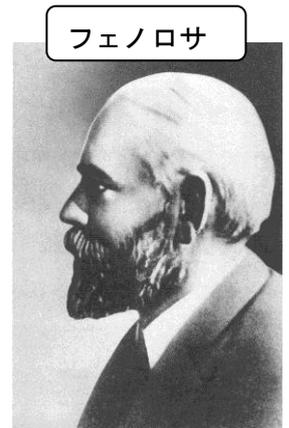
皆さんこんにちは。

今日は、まずこの言葉を紹介します。

今日この奈良に存在せる古物（こぶつ）は、ひとり奈良一地方の宝のみならず、実に日本全国の宝なり。否（いな）、日本全国の宝のみならず、世界においてまた得べからざるの至宝なり。ゆえに余は信ず。この古物を保存護守するの大任（たいにん）は、すなわち奈良諸君の宜しく尽くすべき義務にして、また奈良諸君の大いなる榮譽なりと。

■フェノロサと新納忠之介（にいろ・ちゅうのすけ）

この言葉は、明治21年（1988年）、6月5日、今から125年前に、浄教寺（じょうきょうじ）で講演をしたフェノロサの言葉です。明治元年に「神仏分離令」が發布され、明治元年からの8年間で、全国に10万以上あったお寺が半数となり、数えきれないほどの文化財が失われたといわれています。この「廃仏毀釈」と呼ばれる嵐は、奈良にも影響を与え、興福寺の五重塔が当時、2万5千円で売りに出されたというのは有名な話です。



フェノロサ

明治11年（1878年）、東京大学に赴任するために来日したフェノロサは、日本美術の美しさにひかれるとともに、日本人が自らの文化を低く評価し、多くのお寺や仏像が破壊されていくことに衝撃を受け、日本美術の保護に立ち上がりました。彼は、次のように語っています。

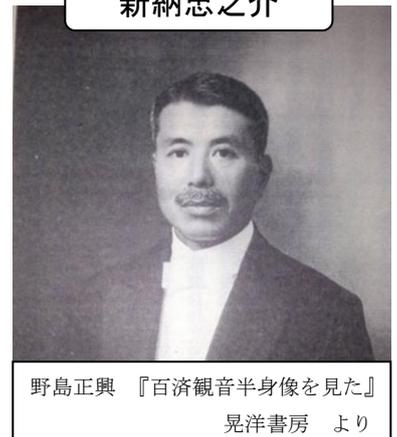
奈良は、日本のローマであり、アジアの仏教美術は、奈良において完全なものに仕上がった。奈良は中央アジアの博物館である。しかし、奈良の皆さん、奈良が学者たちだけの古代調査場となっていることに甘んじてよいのでしょうか。奈良の皆さんこそ、美術復古の指針となり、その益を世上に及ぼさなければならないのであります。ローマがヨーロッパの模範となりましたように、奈良もきっとアジアの模範となりましょう。ただし、それは、皆様が努めるかどうかにかかっているのであります。

フェノロサについては、平成22年度の校園長会でお話ししています。その時は、フェノロサの講演を聞いた森川杜園（とえん）という人物を中心に話しました。一刀彫の芸術家であった森川は、フェノロサの講演を聞いて賛同する聴衆に内心で反駁しますが、一方で自分も奈良のために何をしてきたのかを自分自身に問いました。

今日はフェノロサの助手であった岡倉天心、そして新納忠之介（にいろ ちゅうのすけ）という人物の話をしていきます。岡倉天心については説明もいらないかと思いますが、初代の東京美術学校（現東京芸術大学）の学長に就任し、生涯を通じて日本美術の復興、振興に力を注がれた方です。その岡倉天心が東京美術学校を辞職して創立したのが、「日本美術院」です。日本美術院の「第1部」は、美術工芸の制作、「第2部」は、国宝などの修理を行う部署でした。当時、「第2部」の事務所は奈良におかれていたことから、「奈良美術院」と呼ばれていました。

その初代所長が、新納忠之介という人物なのです。写真は、新納忠之介46歳のもので、奈良の雑司町に住んでいました。彼は、生涯で2,000体を超える仏像の修復に携わり、奈良にある国宝の仏像は、ほとんど彼の手が入っているとされています。興福寺の阿修羅像は明治36年の修復、法隆寺夢殿の救世観音や百済観音は、明治38年から39年にかけて修復されたと言われています。この新納忠之介は、後年、自分の歩みを振り返り、このようなことを語っています。

新納忠之介



自分は芸術家・彫刻家として生きていたいと思っていた。仏像修理の世界に身を置くことは、彫刻科として生きようとした自分の道を絶たれることになる。しかし、恩師である岡倉天心の意向とあれば、いたしかたない。意を決して、修理の道に進んだ。すると、案ずるより産むがやすし。この道に精進すればするほど、自分にとっては華やかな仕事であり、この道に携わることに喜びをもつようになった。

現在、この「奈良美術院」は、「美術院国宝修理所」と組織が再編され、京都に「財団法人美術院」として事務所が置かれています。なぜこのような話をしたかという、先日開催された第3回世界遺産学習サミットの内容について伝えたいからです。

■世界遺産学習全国サミット

サミットでは、リレートークにおいて、「財団法人美術院」所長、藤本青一（ふじもと せいいち）氏に話をさせていただきました。藤本所長は、次のように話されました。

文化財修理の基本的な考え方は、現状維持修理にある。現状維持修理とは、今日までの千何百年の間、大切に伝えてくださった姿を現状のまま、次の世代に、安全な形で伝えようというものだ。たとえばよろぼろでも、それが当初のものであれば大切に処理をして、後世に伝える。「当初に近い姿に戻す」ということも、現状維持修理の目的であり、海外では、

「極彩色に戻したらいい」「金箔をはった元の姿に戻したらいい」という考え方もあるが、日本では、そうはしていない。ほとんどの仏像は、修理を重ねて今日に伝わってきている。これからも、損傷が進まないようにして、今ある美しい姿を、次の世代にも見てもらえるよう、大切に保存していきたい。永遠の命をつないでいきたい。



私が、大会後に聞いた話ですが、例えば、仏像修理を行う際に、「欠けているところに新し

い部材を補って修復する方がいいのか、あるいは、欠けたところをそのままに保存する処理をして次の世代に伝えていく方がいいのか」、それを見極めるのだそうです。また、木材ではなく絹のものであれば、「傷んでいる箇所に正絹を貼り合わせればいいのか、あるいは、千三百年の時を経て傷んでいる部分をそのままにする修復をすればいいのか」、その修復の方針、次の世代への伝え方をしっかりと決めることなしに、修復に取りかかることはできないのだそうです。これを決定することが、一番重要であり難しいことなのだという話をうかがって、なるほどと思いました。「どのような姿を未来の人々に見てもらおうのか」ということを想像し、議論し、方針をたて、修復をしていくということなのです。そして、次の世代にしっかりとつないでいくことが大切だということです。

世界遺産学習では、次の三つの誇りをテーマに学習を進めています。

- 奈良にある素晴らしい文化財や伝統などに対する誇り
- 千年単位で文化財や伝統を守り、受け継いできた奈良の人々の営みに対する誇り
- 本物に触れて学ぶことができた自分に対する誇り

今回の世界遺産学習サミットは、この三つの誇りのうち、二つ目の誇りである「千年単位で文化財や伝統を守り、受け継いできた奈良の人々の営みに対する誇り」をテーマに据えて開催しました。これまでも、「深く知る」ことが大切であるとの話を幾度もしてきましたが、文化財を修復し、我々の時代に残してくれた人々の思いや悩みや苦しみなども含めて学ぶことが、「深く知る」ことになるのです。東大寺の大仏は2回も復興されました。薬師寺の東塔は、10年をかけて修復されています。これらの事実を学ぶだけでなく、なぜ修復されているのか、どんな思いで修復しているのかなど、その事実の向こうにある人々の思いや営みに思いを馳せることが大切です。

奈良国立博物館学芸部長の西山先生が、ご自身連載の新聞コラム「風に吹かれて」で、世界遺産学習全国サミットの「聖武天皇の字を見て書こう」という小学生向けの体験講座について紹介してくださいました。登美ヶ丘小学校の辻倉先生による「聖武天皇の字を見て書こう」の実践は、4年前の平成21年5月の校園長会でも紹介しました。そして、「こんな学習をしたことを、子どもたちはきっと忘れないと思う。こんな先生に出会えた子どもたちは幸せだ。どうかこのような先生を現場で育ててください。」と皆さんにお願いをしました。その後、様々



小学生が書いた字

な実践が各学校において展開されています。
今後も、多様な実践が現場の先生方によって
生まれるだろうと期待しています。

今年のサミットは、北は北海道石狩市から
南は沖縄県読谷村まで、総数705名の皆さん
に参加していただきました。昨年度と比較
すると約100名の増加があり、大変うれし
く思っております。奈良らしい教育の中核と
して推進している取組であります。将来的
には奈良のみならず全国各地でこのサミット
が開催されることを願っています。来年は、
奈良で開催される予定ですが、市内教員約1,
800人がこぞって参加し会場を埋め尽くす
ような大会になってほしいと思います。
今後も現場の先生方の熱心な取組を期待しま
すとともに、校園長の皆さんには取組への助
言等よろしくをお願いします。

